

平成 28 年度 第 4 回 研究会, 研究委員会の近況と活動日程

上坂 貴志 栗島 聡

Activity Report: Committee of Study Groups

Takashi Uesaka Satoshi Kurishima

研究委員会では現在 7 の研究会活動とトワイライトサロンや研究委員会フォーラム等のイベントを運営しています。平成 28 年 8 月 1 日現在の各研究会活動と各種イベントの予定などを掲載しますので、ご興味のある研究会やイベントには是非積極的な参画をお願いいたします。

1. 研究会活動

(1) プロジェクト計画における QFD 応用研究会

(主査: 横山 真一郎 東京都市大学)

本研究会は、QFD (Quality Function Deployment : 品質機能展開) の考え方を援用することにより、情報の共有、知識の蓄積などを可能とする論理的なプロジェクト計画作成のための手法、方法論を検討することを目的に研究を行って来ました。最近では、QFD のみならず、プロジェクトにおける情報の定量化やシステム設計、さらにリスク分析など、QFD と関連の深い分野に関しても積極的に取り組んでいます。研究会の成果物は、研究発表会や国際会議において発表し、論文投稿を研究会員に奨励しています。現在は、プロジェクトの定量的管理を中心とした研究テーマでの議論を行っています。産学共同で、より深い議論を行う為にメンバーを募集しています。是非皆様方の研究への参加、また皆様方からの情報の提供をお待ちしています。

<直近の活動実績>

・ 6 月 24 日研究会開催@PM 学会事務室

プロジェクトチームの生産性の違いについてメンバーから問題提起がありました。FFS 理論に基づいて把握したプロジェクトマネージャーとメンバーの特性による違いなど、既存研究とそこからの発展性について議論をしました。

(2) リスク・マネジメント研究会

(主査: 武井 勲 武井勲リスク・マネジメント研究所)

プロジェクトの事例を収集し、そこから効果的なリスク・マネジメントの研修方法について検討をしています。また、新規性のあるリスク・マネジメント研修の内容について検討を開始しました。

(3) ソーシャル・プロジェクトマネジメント研究会

(主査: 河合 輝欣 ユー・エス・イー)

ソーシャル PM の体系化を目指して、社会の基盤情報システムとしての官公庁プロジェクト等に焦点を当てて研究会を行っています。

<直近の活動実績>

現在、当研究会では、社会インフラプロジェクトの事例研究として、総務省の「ICT 街づくり」や東日本大震災の復旧・復興の街づくりを研究テーマとし、ICT プロジェクトマネジメントの視点から、知見・知識の集積を行い、知識や理論の体系化を試みています。

・ 7 月 22 日: 研究会開催

[場所: 豊洲センタービル 21 階 A 会議室]

作成中の「「ICT スマートタウン」導入・展開のためのガイドライン」について、レビューおよびディスカッションを実施しました。

[議事内容]

① ICT スマートタウンプロジェクトについて

①課題→②対策→③事例として整理し、プロジェクトの収益性・事業性についても明確にする。

② ガイドラインの作成スケジュールについて

議論については次回でいったん終了とし、完成版とする。

【問い合わせ先】 yamamotot@nttdatacs.co.jp (山本)

(4) PM 人材育成研究会

(主査: 池田 修一 ポジティブ・ラーニング)

前回までは、企業におけるプロジェクトマネジメントに関して、経営課題における業務側と情報システム側について議論をしてきましたが、今回はステークホルダーについて議論を始めました。プロジェクトマネジメントにおいて多くの影響を受けるのは人、すなわちステークホルダーであり、このステークホルダーをきちんとマネジメントすることがプロジェクトの成功の可否につながります。ただ、ステークホルダーとの関わりを持つことが苦手なプロジェクトマネージャもあり、

プロジェクトの実施中に頭を悩ませていることも多いかと思います。

通常、ステークホルダーをマネジメントするプロセスとしては

- ① プロジェクトに影響を与えるか、影響を受けるステークホルダーを特定する
- ② 各ステークホルダーのニーズや期待を確認し、利害や成功の影響を与える可能性を分析する
- ③ 分析した結果により、効果的にステークホルダーに関与してもらうために戦略や計画を立てる
- ④ ステークホルダーのニーズや期待に応えるためにコミュニケーションを通して計画を実施する
- ⑤ ステークホルダーの関係を監視し、必要があれば調整する

になります。ただ、このプロセスをそのまま追っていくだけでは上手くいかないことは、どのプロジェクトマネージャにおいても経験済みです。これは人に関するマネジメントなので、更に人に関する奥深い洞察が必要になります。

今回、研究会ではこのプロセスに関してさらに検討し、プロジェクトマネージャのステークホルダーに関する視座・視点を原点から考え、プロジェクトマネージャが取るべき行動について研究していく予定です。

今後の活動：

8、9月度 プロジェクトに影響を及ぼすステークホルダー

【問い合わせ先】 pmcom2016@freeml.com

(5) メンタルヘルス研究会

(主査：前田 英行 日立公共システム)

メンタルヘルス研究に関するコミュニケーションの場として、毎月1回の定例会と年1回の国内外各地におけるワークショップを中心に活動しています。

メンタルヘルス不調に陥らない為にはどうしたら良いか。プロジェクト関係者のメンタルヘルス問題を予防し、プロジェクトの成功に貢献することがメインテーマです。

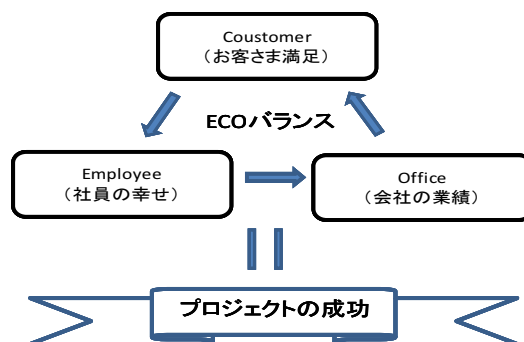
定例会は原則第三水曜日に勉強会・情報交換会を実施しています。5名から10名程度のメンバーが参加し、プレゼンター(持ち回り)が議題を提示します。参加メンバーの対話を通して、メンタルヘルス問題の予防策となる知恵の創造を図ります。お気軽に体験参加してください。



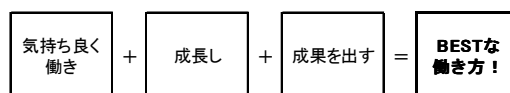
7/20の様子

<「メンタルヘルス研究会」のミッションとは>

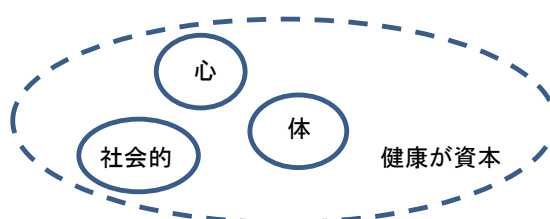
- ① ECO バランスの取れた「プロジェクトの成功」に貢献する (E:Employee 社員の幸せ, C:Customer お客さま満足, O:Office 会社の業績)



- ② メンバーが「気持ち良く働き」&「成長し」&「成果を出す」働き方を考える
(「気持ち良く働き」「成長し」「成果を出す」はアンド条件。「頑張る」は必要ない)



- ③ メンバーが「心」体「社会的」な健康を確保できるような方法を見つけ、提言する



<過去2か月の活動実績>

6月15日：定例会開催(テーマ：①働き方改革とは ②あなたのメンタルヘルス問題を改善)

- ① 働き方改革とは

昨今話題の「働き方改革」。長時間労働はメンタル不調の一因と言われていますが、なぜ無くないのでしょうか。社会的な動きと、個社別の具

体的な取り組みを踏まえて意見交換しました。

② あなたのメンタルヘルス問題を改善

メンタルヘルス問題は外から見えずらく、やる気や能力の問題と捉えられ、誤った対処がなされてしまうことがあります。脳、心、感情、人間関係の仕組みを学び、仕組みに基づいた改善策を議論しました。

7月20日：定例会開催

① メンタルヘルス関連の事業に取り組む技術系スタートアップ

技術系スタートアップ企業では「その技術で商売が成り立つか？」が課題です。複数のスタートアップ企業の事例を踏まえ、ビッグデータや人工知能を活用した技術をメンタルヘルスにどう活用していくか、議論しました。

② ヒトの仕組みから分かったメンタルヘルス不全発症プロセス

ストレスへの心身の反応は、本来は自分の身を守るための仕組みですが、ストレス状態が長く続くとメンタルヘルス不全を発症すると考えられます。ヒトの脳や心を科学的に見ることで、心を客観的に理解し、メンタルヘルス不全の予防に生かす方法を議論しました。

<今後の予定>

8月4日：ワークショップ開催予定@千葉工大

多くの大学でプロジェクトベース学習(PBL:Project-Based Learning)が導入され、大きな成果を上げています。PBLは和訳すると「課題解決型学習」となり、学習者がチームを組み、自分たちで課題を設定して解決していく学習法です。しかし、メンバーのやらされ感や基本的なマネジメントスキルの欠如により、PBLにおけるメンバーのモチベーション低下が指摘される等の問題もあります。

本ワークショップでは、千葉工業大学と芝浦工業大学のPBLを経験した学生が合同でワールドカフェを実施し、PBLにおけるリーダーシップ、コミュニケーション、ストレス等に関する問題点を抽出し、楽しく効果的なPBLを実現するための方策について検討します。

9月21日：定例会開催予定(テーマ:AIの業務活用 他)

【問い合わせ先】pmmh_all@googlegroups.com

(6) プロジェクトのデータ解析と見積り研究会

(主査:梶山 昌之 DSR)

プロジェクトの規模、工数・コスト・工期・品

質・リスクなどの測定量を正しく分析するためデータ解析手法を学び、見積りおよびプロジェクト計画への活用法を研究します。

現在の学習・研究テーマとしては以下の3つになります。

- ① 要求を仕様化する技術
- ② R言語の学習と活用
- ③ アナリティクス手法の学習と活用

要求を仕様化する記述については USDM (Universal Specification Describing Manner) の考案者である清水吉男氏の著書で学習を行っており、7月中旬に完了の予定です。研究会では、仕様書に含まれる条件と動詞の数を計測した値によるメトリクス(USDMポイント)を提案し、2016度春季研究発表大会で論文を発表しました。

USDM			仕様カウント			要求カウント		
			判別	作業	合計	判別	作業	合計
pot-210		コンソートの後書きで、ポットを利用できない状態/利用できない状態にする。	72	83	155	72	83	155
pot-210-1		コンソートを押し込むと(A)、設定値にはデフォルト値がセットされ(A)、ポットが機能する状態(アイドル)になる(A)。	1	2	3			
pot-210-12		コンソートを強く(A)、ポットは蓋の開け閉め以外は何も機能しなくなる(A)。	1	1	2			
pot-220		アイドルの状態、蓋を閉じたら、水位を確認し、条件に合えば動作を行います。				2	2	4
pot-220-1		蓋センサーが3sec以上onとなった、蓋が閉じられたと判断する。						
pot-220-2		蓋が閉じられ、水量が適正な場合(A)、沸騰行為をする(A)。	1	1	2			
pot-220-3		蓋が閉じられても、水量が異常な場合(A)の場合、状態はアイドルのまま(A)である。	1	1	2			

「R言語の学習と活用」および「アナリティクスの手法の学習と活用」では、統計の基礎および各種のデータマイニング手法を学習中です。

要求の仕様化技術を学びたい方、基本的な統計を初歩から学びたい方、または、ビッグデータとそのデータ処理技術に興味がある方には参加をお勧めします。

<今後の予定>

会合は1回/月を目安に開催しています。

当研究会では現時点までの活動で、Capers Jones氏の見積のすべて、Excel統計、コスト評価知識体系(CEBoK)、要求の仕様化技術、R言語による分析事例、データマイニング手法などのコンテンツを蓄積しており、研究会メンバー参加者はこれらのコンテンツを社内の研修や論文作成などに活用できます。

また、毎回独立したテーマで参加者のスキルに合わせた運営を行っていますので途中からの参加も歓迎です。

(7) フロネシス PM (知恵ある実践) 研究会

(主査:中村 太一 国立情報学研究所)

現在、暫定的に隔月の例会開催になっており、7月は休会で、7月20日に第36回の例会が開催されました。今回は予定していたゲストが参加でき

ず、急遽出席されたメンバー一人、ひとりが、話題を提供し、そこからメンバー全員でのディスカッションに発展させました。話題としては、・日本におけるアジャイル開発の動向について、アジャイルの原型モデルは日本にあるが、日本ではなかなかアジャイルが普及しない。その要因の一つとして日本特有のベンダー主導のプロジェクト開発にあるようだ。・総務省が日本の一般企業の IT 人材強化の必要性を説いている（日経新聞 6 月 19 日）が、その背景と具体的な人材像とはなにかについての議論。・日本ではまだまだ標準化されたプログラムマネジメントのプロセスが普及していない。その背景と今後の普及のための大学でのプログラ

ムマネジメント講座の取り組みについての議論など多岐の観点から活発な意見交換が成された。

次回の例会は 9 月 29 日を予定しております。

2. その他

活動中の研究会への参加や、新規研究会活動に関する問い合わせは下記までご連絡をお願いします。

【問い合わせ先】 pmKenkyu@jp.ibm.com

研究委員会委員長 上坂 貴志

研究委員会委員 川口 智／笠崎 裕子